

## 開会挨拶

京都大学総長 山極 壽一



皆さんおはようございます。きょうはたくさんの方々にご参加をいただき、とてもうれしく思っております。

第13回、京都大学附置研究所センターシンポジウムの開催に際し、一言ご挨拶を申し上げます。

本学は、1897年に創設され、「自重自敬」の精神に基づき、常識にとらわれない自由な学風を育み、個性的で創造的な学問をつくってまいりました。

一方、世界は20世紀には想像しなかったような急激な変化を経験しつつあり、それらを乗り越えるパラダイムシフトが求められております。国際社会はもちろん、国内においても現代は急激な変化の渦の中にあることは間違いありません。

社会的には、民族間、宗教観の対立の激化、国際資源競争や経済活動の不安定化、地球レベルでは温暖化問題と人口爆発、国内においても超高齢化社会への対策など、さまざまな難題が沸き上がっております。

このような変化の極めて早い時代だからこそ、地球社会の平和と共存のためには、真理の探究に基づいて、これまでの常識を塗り変えるような新しい発想と、その理論構築が学術・教育機関の一翼を担う本学の重要な役目であると考えております。

今年度、本学は文部科学大臣より指定国立大学として指定されました。指定国立大学とは、世界最高水準の教育研究活動の展開が可能であると、その実力と潜在能力を認められた国立大学のことでございます。

今後は、日本を代表する大学として国内の競争環境の枠組みから出て、国際的な競争環境の中で世界の有力大学と伍していくことが求められ、社会や経済の発展に貢献する取り組みの具体的成果を積極的に発信し、国立大学改革の推進役としての役割を果たすことが期待されております。

この指定を受けたことをうれしく思うとともに、これからますます努力を惜しむことなく、本学の教育力と研究力を強化していくことの大きな責任を感じ、身が引き締まる思いでございます。

さて、本学には10学部、18大学院に加え、理学、工学、医学、生物学、人文社会科学までを網羅する20の附置研究所とセンターがございます。これらの附置研究所と研究センターでは、国内外の学術研究をリードする先端的、学際的、基盤的課題に取り組み、新たな知を創出する研究活動を行っており、これまでノーベル賞やフィールズ賞の受賞者も輩

出しております。

平成27年4月には、本学の将来構想、WINDOW構想とありますが、この柱の一つである独創的な先端研究、融合研究の推進による学術・社会のイノベーションの創出のもと、附置研究所と研究センターの強み、特色をさらに伸ばすとともに、異なる視点を持つ研究者の知を結集させ、異分野融合、新分野創成の促進も図ることを目指し、京都大学研究連携基盤（Kyoto University Research Coordination Alliance）を設置いたしました。

京都大学附置研究所センターシンポジウムは、本学の附置研究所センターが相互連絡のもとに学際的な共同研究を推進するとともに、研究成果の発信のために、これまで12回にわたり京都以外の中核都市で毎年シンポジウムを開催してまいりました。

本日は、この研究連携基盤の研究活動を踏まえたパネルディスカッションを、『「挑戦の意味、失敗の意味」—未踏科学研究ユニットはどこへ向かうのか』と題して行う予定でございます。

本シンポジウムの企画の目的は、次の世を明るくするために京都大学の研究者が語りかけることでございます。我々研究者は、社会に対するリスペクトを持って、この地球という大地を希望の地にできると信じて努力を続けております。その姿を見ていただければと思います。

きょうは、高校生をはじめとして、これから次世代を担う若者との交流の場になると期待をしております。京都からの挑戦として、「京大起春風」に耳を傾けていただければと思います。私も、最後のディスカッションに参加をさせていただき、討論をさせていただければと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。